中野莊次著

校本風葉和歌集

京都帝國大學教授
文學博士 吉澤義則校閲
文學士 中野莊次著

校本風葉和歌集

京都 贊精社刊行

昭和八年十月一日印刷
昭和八年十月八日發行

校本風葉和歌集
定價　四圓五拾錢

著者　中野莊次

發行者　京都市上京區河原町通白梅圖子南四四一番地　白井雄次

印刷者　京都市中京區柳馬場三條南　株式會社似玉堂　代表者　福井松之助

版權所有

發行所　京都市上京區河原町通白梅圖子南　贊精社
電話上(3)二六七〇番
振替大阪四六三四七番

序

風葉和歌集は古物語研究に缺くべからざる無二の至寶なり。されば疾くに研究せらるべくして未だ研究せられず、夙く校勘せらるべくして未だ校勘せられざりしなり。中野君こゝに思ひをひそめ、京都帝國大學在學中より、弘く傳本を東西に索ね、片紙といへどもこの書ありと聞けば、必ず往訪檢覈して一日も怠ることなかりき。おもふに、現存せる風葉集にして、君が目に觸れざるもの一本も殘らざるべし。

かくて校讎を完成しつゝ、本書の研鑽に沒頭すること年有り、その收獲の一端は曩に國語・國文誌上に發表せり。しかも家業は君をして長く國文學の研攻に專念ならしむるをゆるさず。乃ち本書とその所說とを雕槧して、今日に至る學的生活を記念し淸算し、以て潔く實世間の人とならんとす。

この書一度世に出でば、秋霧のおぼ〳〵しかりし古物語の分野は、名もなき花一枝の色香までも殘るくまなく明らめいでらるべく、ひいては國文學界

の展望にいみじき變化を招致すべきを期待するなり。この版行は蓋し君が生活轉向の石ぶみにして、また國文學界更新の石ぶみなるべし。

ふみわけし
君があととふ
秋の月の
まさやかにあらむ
花野をおもふ

昭和八年中秋前七日

吉澤義則

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

自序

稿本を携へて葛城山麓に移つてから三年になる。その間二三度上梓してはとのお言葉もあつたが未だ完成に至らず、身邊には次第に雜務が重なつて來て、或ひはこのまゝ紙魚の荒すに任せるのではないかとさへ思はれた。今恩師のお力添により漸く世に出るを得た事は喜びに堪へぬところである。

竹取より源氏に、更に源氏の跡を追つて作り出された幾多物語の數々もふる年月と共に漸次その俤を絕つて、今日では題名すら失はれて了つたものも少なからずあらう。本集は夫等源氏を盟主とする古物語二百種を收藏する寶庫で、苟しくも「物語」を云々するには、是非一度はこの寶藏の扉を開かねばならぬと信ずる。願はくは篤學の士の座右に侍して、永く研鑽の一助とならむ事を。

本書の生れ出づるについて、始終御指導と御同情に預り、且つ御多用中にも拘らず身にあまる卷頭の詞を御惠み下された吉澤先生には全く御禮の言葉

もない。東京の山岸德平先生、池田龜鑑先生、廣島の岡本明先生には特に御指導を辱ふした。茲に謹みて厚く御禮申しあげる。尙學友筏勳、飯塚俊雄兩君の御援助及び創業に當つて特に本書を御撰び下さつた贊精社主人白井雄次氏の御厚意に深甚の謝意を申しあげる。

昭和八年九月

中野莊次記

目次

解説……一
校本風葉和歌集……三三
物語別風葉和歌集……二九一
散逸物語索引……五一五
五句索引……五二九

校本風葉和歌集

解　説

風葉和歌集は、文永の年に時の皇太后藤原姞子（ヨシ）の仰せによつて撰進されたもので、當時に存在した凡そ二百種の物語の歌を收載して居り、編者は皇太后に近侍してゐた人だらうと思はれる。もとは二十卷あつたが現存本は第十九、二十の兩卷が欠けてゐて十八卷しかなく、歌數は現在一千四百〇八首である。之等の詳細は雜誌國語國文（昭和八年二月號）に述べて置いた。

一　諸傳本について

風葉集の諸本について今日迄に見たものを擧げてみると

一　京都帝大國文研究室藏本　京大本
二　東北帝大藏狩野氏舊藏本　狩野本
三　宮內省圖書寮藏本　圖書寮本
四　內閣文庫藏本　內閣本
五　彰考館文庫藏甲本　彰甲本
六　同　乙　本　彰乙本
七　刈谷圖書館藏本　刈谷本
八　龍谷大學藏本　龍大本
九　淺野圖書館藏本　淺野本
十　神宮文庫藏本　神宮本
十一　池田龜鑑氏藏本　池田本

の十一種で、淺野本は零本であり神宮本と池田本とは拔書本である。尙此外に德川家藏本があり、その他一二傳本を耳にしてはゐるが何れも未見である。右の外刊本として

丹鶴叢書辛亥帙所收本　　丹鶴本
續々群書類從第十四歌文之部所收本　　類從本
國歌大系第二十三卷所收本　　大系本

の三種がある。今、解說の便宜上版本より順次に說明を試みよう。

丹鶴本

丹鶴本は同叢書木版本辛亥帙（辛亥は嘉永四年に當る）に入つてゐて、明治四十五年刊行の活版本には收められてゐない。これは已に明治四十年に續々群書類從に收められて出て了つたからであらう（丹鶴叢書木版本にあつて活版本にないものは、本書の外に風邇津連奈幾物語、侍中群要、東大寺要錄があり、何れも續々群書類從にて刊行されてゐる。）

本書は美濃本四册十八卷で、十行書（歌は一行書）になつてゐる。卽ち

第一册　春上（卷第一）　春下（二）　夏（三）　秋上（四）　秋下（五）　五卷
第二册　冬（六）　神祇釋教（七）　離別羇旅（八）　哀傷（九）　賀（十）　五卷
第三册　戀一（十一）　戀二（十二）　戀三（十三）　戀四（十四）　戀五（十五）　五卷
第四册　雜一（十六）　雜二（十七）　雜三（十八）　三卷

で、總數は一千三百八十七首（內三首詞ありて歌なし、詞書中の歌は加算せず）、第四册の終りに

右風葉和歌集以三本對校了

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

とあつて、序文以下全卷に亙つて「一本」の校合があり、「歟」「本ノマヽ」の註記が所々に見出される。そして序文に頭註を施す外現存物語、百番歌合、拾遺百番歌合と一致する歌には夫々出典を擧げ對校を加へてゐる。

○校合には本書の「一本」を底本として用ひた。

○是等の物語歌合等の出典の註記は本書の附加で原本にはなかつたものである。

類從本

例言によると、丹鶴本に黑川眞道氏藏村田春門校合本を以て校訂を加へ、神祇釋教を別けて前者を卷七、後者を卷八とし、離別羇旅を同樣二分して卷九卷十とし、哀傷を卷十一とし、以下順次に繰下げて、丹鶴本と同量を二十卷としてゐる。この卷別の誤りなることは雜誌「國語國文」に述べた通りであるが、要するに春門本がさうした別け方であつたらうと思はれ、これ等は後述の狩野本第一册見返しに況齋の記してゐる大野氏本なるものゝ禍ひではあるまいかと思はれる。

本書が春門本との校訂を例言に明記してはゐるが、誤植と思ひ得ない誤謬が所々にあり、狩野本の朱記、貼紙を通して見た村田本より考へても、嚴密な校合だとは考へられない（因に黑川氏藏本は大震災に燒失の由なり。）殊に本書は丹鶴本に存在する戀五、一一一〇の歌と次の一一一一の詞を脫してをり「悲」を「戀」と誤つたのが隨分指摘され、丹鶴本にある異同を獨斷的に取捨した爲の誤りや强ひて物語、歌合を取入れたと思はれる箇所も相當ある。丹鶴本に比して幾分辭句の增補は認め得、且つ春門本との校訂はしてあるが十八卷の底本より優れてゐるとは言ひ得ない。

大系本

「巻別は丹鶴本（二十巻）に從ひ、宮内省圖書寮本たる清水濱臣藏本（十八巻）を參照して校訂」したと例言に記してある。が丹鶴本は前述の如く十八巻で、本書の丹鶴本とは類從本を指してゐるのは言ふまでもない。勿論類從本の戀五の脱落歌は補はれてをり、其他多少補訂された跡は認められるが、元々類從本を底本とされてゐる爲に同書の誤植もそのまゝ傳へた處多く、却つて改惡されてはゐまいかと思はれる點も見出される。本書の「解題」については已に前記誌上に論じて置いたからこゝには省略するが、巻頭の物語部類も何の巻に何首あるといふのみでは、たゞ見當付け得る丈で、搜索の勞力は一通ではない。要するに、本書も叢書としての種々止むを得ない制限もあつたらうが、わざ〳〵印行するにはあまりに不親切だつたと言はれないだらうか。

京大本

本書は美濃本四册で巻別丹鶴本に同じく各册行數一定せず大體九――十二行で、歌は第四册のみ二行書になつてゐる。系統は丹鶴本の「一本」に屬し、他本より影寫したものらしく哀傷に一丁重複してゐてその配字全く同一である。尚本書には第一册の終りに落丁秋下の末二十三首分がある。本書は諸本中最も歌數多く、丹鶴本に比し次の二十五首を增加し得る。卽ち

丹鶴本に歌のみ空白なる處　二首

春下一（一一五）　秋下一（三三七）

同書に全然なきもの　二十三首

夏一（一六一）　離別四（五三五　五三六　五三七　五三八）

哀傷十七（六〇六・六一〇　六一一　六一二　六一三・六二九　六三〇　六三一　六三二・六七一　六七二　六七三

六七四・六八六　六八七　六八八　六八九）

賀一（七三四）

で、哀傷の巻は八十二首が九十九首となる譯である。右の中離別の四首及び哀傷の四個の四首群は、風葉集の原本の形態を考察するに重要な役目を有するものであり、丹鶴本の羇旅の最初に於ける四首の移動も本書によつて證明し得るのである四首一團については後章に記す。

京大本によつて補はれた物語には「みことかしこき」「たなはたのつたへ」の二種があり、從來「濱松」の欠卷と見られてゐた部分に新に二首を加へ、同物語より「山の僧正の母」なる人物を除き、「とりかへばや」より「按察大納言女」の名を去り、其他多少とも散逸物語の歌を增加し得る等本書は實に貴重な資料を多量に含んでゐる。が筆寫の時代新しく文字明確を欠き誤寫の多いことは本書の一難點で、よりよき類本の傳存と出現を切望して止まない。

狩野本

東北帝大圖書館藏本は文學博士狩野享吉氏舊藏書で「金華堂圖書籍」なる印がある。美濃四册本で

第一册（天）　卷一（春上）――卷六（冬）

第二冊（地）　卷七（神祇釋教）――卷十二（戀二）
第三冊（人）　卷十三（戀三）――卷十八（雜三）
第四冊（別冊）　序文・卷十一卷十二の補寫

となつて居り、第一第二冊と第三第四冊との二部の合本の如き體裁で各〻別筆である。第三冊雜三の奥に朱書で

風葉集廿卷今歟十九廿両卷蓋傳本
皆然也此本從卷一至卷十二影寫戸　もと影照とありしを
川氏所藏古鈔本但歟卷十三以下故　墨にて寫と訂正しあり
以狩谷多佳女挿架本補寫

況齋多佳識

とあつて、第一第二冊は戸川氏藏古鈔本の影寫で十二行書、後の二冊は狩谷多佳女藏本で補寫したもので之は九行書である　況齋の交友錄（假に名付く）文政十―天保六の項に狩谷多佳女の名見ゆ。　狩谷本は底本の「一本」に相當してゐるが、戸川本は底本とは出入多く、他本で以て校合してゐて、それには丹鶴本文と同「一本」に一致する所とあるが、原本が校合してあつたのか後に加へたのかは不明である。

戸川本は底本とは餘程異つたもので、先づ序文の落ちてゐた事は、第四冊別冊の序文の後に朱記して「狩谷氏本卷首に此序あり大野氏本おなし、友人村山氏云　扶桑拾葉別集及文の栞に此序を載たり」とあるによつて推察される大野氏は大野廣城（天保十二年歿）を指すか。春上より賀までは辭句のみの異同であるが、戀の部に入つてからは底本と大いに順序を異にしてゐる戸川本の順序は後章に表示する。即ち戀一戀二の二卷に底

本の戀一より戀五までの歌の一部を含み、兩卷は底本の戀二の中途にて接して居り、而も戀二の最後の歌一首は底本戀四に渡つてゐて、これが戀二の終りであるか否かも明瞭に解らないのである（此歌は裏標紙に貼付けた紙の最後の行に當り、歌數としても五十六首で底本の戀二の九十八首に比して少ない樣である。）此調子で戀三戀四戀五と續いたものが現存すれば、或ひは貴重な資料が發見せられるかも知れない。この異つた順序の最初の一項は底本の錯簡を正し得たが（補訂考參照）、他のものは詞書が中斷されて別なものに付いたり、あるべき詞書が落ちてゐたり、又歌の配列順から言つてもよくない場合が多い。が、かうした傳本を、底本系統のものから無闇に拔書されたものと定めるのも危險だ。勿論今迄の研究ではこれ等が一定の標準によつて集められてゐるとは思はれないが、尚今後充分研究さるべき部分である。

狩谷本からの補寫である第三册（戀三より雜三までの）戀五に貼紙の補寫があつて、（一一〇〇より一一〇五の詞まで、原本一枚脫落せるなり、）それに朱筆で、初に「伴藤五郎所藏本（此本係村田春門舊藏）」とあり、後に「天保九年三月葉山小仲太爲余補寫」と記してある。伴藤五郎とは伴直方の事であり、續々群書類從に收められた本集の校合本である「黑川眞道氏藏村田春門校合本」と同じものかと思はれる。直方の「物語書目備考」に用ひられた風葉集はこの春門舊藏本と思はれるが、黑川春村の用ひた風葉集は別のものゝ樣である。尚戸川本には二一、五八六、六六一、六九〇の四首に「村田本」による校合がある。この四ケ所も貼紙も村田本が底本と變りない事を傳へてゐるのみである。

第四册には、前記の如く序文と戀一・戀二の補寫が收めてある。補寫の最初に

狩谷氏本　大野氏本おなし

卷十一せきかぬる涙の色は增るとも（七九六）の歌の下に歌數五十一首つゝめとも（七九七）ヨリたくひなき（八三八）マテ有て此卷終る（心には一〇

六七)ヨリのちの世と(一〇〇五)マテ百三首なし夫より卷十二にうつり歌數四十二首やしまもる(八三九)ヨリまてしはし(八八〇)マテ有てつらけれと(八八一)の歌につゝくハ狩谷本ニテハ十二入ナリ(サレハコノツラケレトノ歌)

○括弧内の數字は本書に於ける順位番號なり。

と朱記がある。卽ち狩谷本が丹鶴本に等しいといふ譯で、「心には(一〇六七)ヨリのちの世と(一〇〇五)マデ百三首なし」とあるのは、後章に示す如く戀三・戀四・戀五に混入してゐる部分で、狩野本では二重に出てゐるのである。

尙この本には、第一册見返しに全卷の卷順を表示し、十九・二十を朱書して、同項下に同樣朱筆で左の如く記してある。

群書一覽に載たる野村尙房の跋によれハ此集二十卷にして今十九二十の両卷ハ元闕なるを大野氏の本ハ釋教を第八卷となし離別を第九卷となし羇旅を第十卷となし哀傷以下是にならひて二卷おくれになりて雜二を第十九卷となし雜三を第二十卷とせりこれ大野氏の所作にしてかゝる傳本ハなき也初學の人まとふ事なかれ　たかしるす

「たかしるす」とは況齋岡本保孝で、野村尙房の跋は後述の刈谷本と龍大本の奥書を指すものである。この卷別は類從本・大系本の採用したものだが、類從本の校合した春門校合本はこの大野本の卷別を採つてゐたのではあるまいか。因に、黑川氏の藏本は大正大震災に燒失の由だから、春門校合本は現存しない譯である。

圖書寮本

清水濱臣舊藏の書入本で、美濃十行本歌二行書上下二册になつてをり、卷別は丹鶴本に同じく上卷は卷第十賀までゝある。底本と同系統で、字形配字等は極めて彰考館乙本美濃本に類似してゐる。奥書は

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com